岡山大学教育学部研究集録　第121号（2002）207－214

メルボルンの住民の暮らし

―参与観察による研究―

野邊　政雄

メルボルンに住むオーストラリア人の家庭でホームステイをおこない，その家族生活や交際を参与観察した。そして，次の2点を明らかにした。①メルボルンでは，大人は1台ずつ車を持つことが一般的になってきた。外出にはたいてい車を使い，近所を歩くことが少なくなったから，近所の人々と知り合いになりにくくなった。そこで，近隣関係や近隣交際が乏しくなり，近所の人々と助けあうこともあまりなくなった。②車を使って外出をするので，自由に行き来できる地理的範囲が広くなった。そのため，住民は広範囲に住む多くの人々の中から，気心があったり，利害や関心を共有する相手を自由に選んで友人関係を取り結び，そうした友人と交遊をしたり，生活の助け合いをおこなっている。

Keywords：メルボルン，参与観察，パーソナル・ネットワーク，ソーシャル・サポート

1　本稿の目的

私は，オーストラリア連邦の首都キャンベラで住民の家族生活や交際を参与観察にもとづいて研究したことがある（野邊 1996）。キャンベラは計画都市であるという点で，他のオーストラリアの都市とは相違している。だから，私がキャンベラで発見したことが他のオーストラリアの都市にどのくらい当てはまるのかがその研究では分からなかった。ところで，オーストラリアでは首都と州都への人口の集中が著しく，1996年の国勢調査によれば全人口の63.6%が首都と州都に居住している。だから，オーストラリアの典型的な都市生活というのは，地方都市での生活ではなく，首都や州都での生活なのである。そこで，私がキャンベラで発見したことがオーストラリアの都市一般にどのくらい当てはまるかを調べるために，ビクトリア州の州都であるメルボルンの家庭で参与観察をおこなうことにした。本稿では，参与観察によってメルボルン住民の家族生活や交際の実態を明らかにするとともに，それがキャンベラにおける家族生活や交際とどのように相違するのかを検討したい。

私は，2001年8月1日から10月14日までと12月23日から翌年の2002年1月11日まで，オーストラリア連邦ビクトリア州のメルボルン大都市圏ホワイトホース市（City of Whitehorse）にあるオーストラリア人家庭でホームステイをした。夫は，マダガスカルの東隣にあるモーリシャスに生まれたインド人である。両親と共に1963年にオーストラリアに移住して来た。大工の棟梁（builder）をしており，47歳である。妻はオーストラリア生まれのスコットランド系のオーストラリア人である。専業主婦をしており，43歳である。夫婦には4人の子供がいる。長女は17歳の高校生，長男は15歳の中学生，次男は12歳の小学生，次女は5歳で幼稚園児である。夫の仕事が順調で，比較的裕福な暮らしをしていた。生活様式から見ると，その家族は中産階層であるといえる。その家庭に滞在しながら，家族の活動にできるだけ参加した。そして，メルボルンの住民がどのような家族生活をおくり，親族，近隣者，友人といかなる交際をしているかを観察した。また，家族生活や交際をどのように感じているかを行動や言動から推し量りつつ，理解しようとした。私はキャンベラにおける家族生活や交際を物差しにして，メルボルンにおける家族生活や交際を観察し，理解しようとした。

岡山大学教育学部社会科教育講座 700－8530 岡山市津島中3－1－1
Basic Characteristics of Personal Networks of Elderly Women in a Small Japanese City
Masao NOBE
Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

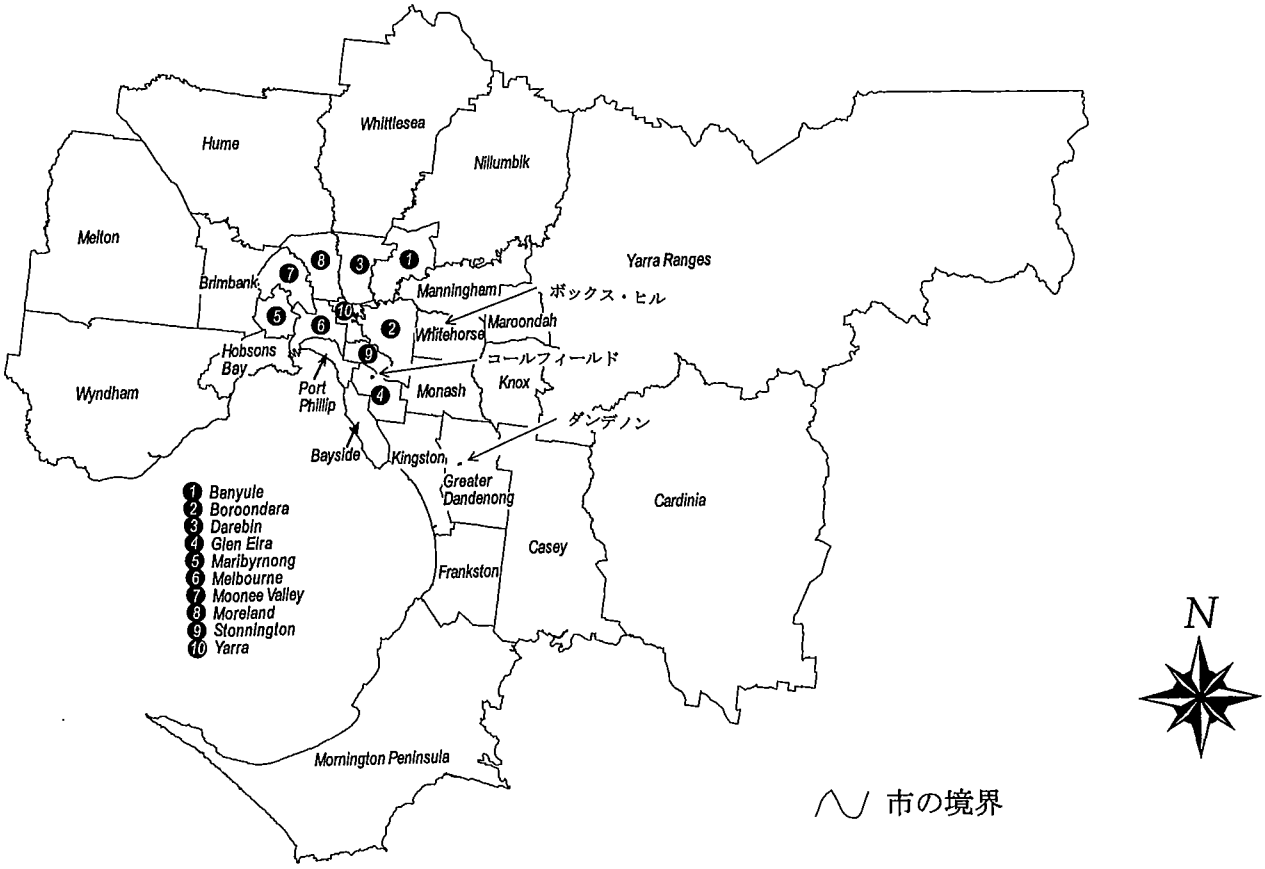

図１　メルボルン大都市圏

２　家族について

私がホームステイをした家族は，ホワイトホース市のボックス・ヒル（Box Hill）に住んでいる（図１を参照）。ボックス・ヒルはメルボルンの中心から東に15キロ・メートルにある。メルボルンの中心駅（フリンダース・ストリート駅）から東方向に鉄道の路線が延びており，ボックス・ヒル駅はその路線の駅である。駅の建物は駐車場のついたショッピング・センターとなっており，スーパー・マーケット，専門店，レストランがそれに入っている。また，駅の周辺には多くの商店やレストランがある。中国人やベトナム人が経営している商店やレストランが多く，中国語やベトナム語の看板が目につく。私がホームステイをした家族（A家）の住宅はボックス・ヒル駅から約1.5キロ・メートルのところにあり，駅から歩くと15分くらいで行ける。A家の住宅は住宅地の中にある。駅からバスが出ており，ちょうどA家の住宅の前がバス停となっている。

A家の夫が1963年にオーストラリアに移住して来たとき，メルボルンの中心から東南30キロ・メートルにあるダンデノン（Dandenong）に住んだ（図１を参照）。その当時，ダンデノンの一帯は農場であったので，そこから19キロ・メートルも離れたフランクストン（Frankston）の海岸まで見渡せたという。メルボルン大都市圏のスプロール化が進み，現在ではダンデノン一帯は住宅地となっている。父親は金属工として工場で働き，母親もやはり工場に勤めた。夫は５人兄弟の３番目で，さらに妹がいる。両親が共働きであったので，夫が妹の世話をしていた。当時のオーストラリアは白豪主義を標榜していたこともあり，一家はさまざまな差別を受け，苦労をしたそうだ。

A家の妻はメルボルンで生まれた。彼女はこれまで主にメルボルンに住んでいたが，両親の仕事の関係でビクトリア州の地方のある町に子供のときに一時住んでいたこともある。

彼らは同じ職業学校で調理を勉強していたときに知り合い，1983年に結婚をした。妻の両親がボックス・ヒルに住んでいたことから，夫婦はボックス・ヒルにはじめ住んだ。夫婦は1986年にクィーンズランド州の観光地に行き，キャンピングカーで暮らしながら一年間ほどホテルで調理の仕事をした。長男はそこで生まれた。オーストラリア各地をキャンピングカーで旅行した後，メルボルンのボックス・ヒルで再び暮らすようになった。メルボルンに戻って来て，夫はまず移民の宿舎の管理人となり，

移住したての移民の世話をした。その後，夫は大工の技術を自分で身につけて，棟梁となった。夫婦がメルボルンに戻って来てからは，妻は専業主婦をしている。

夫婦は4人の子供たちがのびのびと遊べるように，広い庭のある現在の住宅を1998年に購入した。1916年に建設された2階建て住宅で，敷地は200坪以上ある。オーストラリア人は古い住宅に高い価値を認めるが，夫婦も歴史のある住宅に誇りを持っている。購入後，夫は自分で住宅の内装を改修した。5つの寝室が住宅にはあり，子供それぞれに1部屋があてがわれている。夫婦は車を2台所有している。夫は1台を仕事に使っており，もう1台は家族生活に利用している。庭の一角で雌鳥を4羽飼い，料理に使う卵を生ませている。

家族全員はボックス・ヒルにあるカトリック教会の信者である。一家は毎週の日曜日の朝にその教会へミサに行っていた。また，すべての子供をカトリック系の私立学校に通わせている。長男の学校だけは遠くにあり，長男はバスで通学していた。長女，次男，次女の学校は，ボックス・ヒルのカトリック教会の隣にある。妻は朝3人の子供を車で学校に送り，次男と次女を夕方に迎えに行っていた。

家族は習い事をしたり，スポーツを楽しんでいた。夫は週に1度バスケット・ボールをしに出かけていた。妻は週に1度ジムに行き，空手のエアロビクスをしていた。長男は放課後に教室に通ってバイオリンを習っており，夕方自宅でバイオリンを弾いていた。長男と次男はオーストラリアン・ルール・フットボールの地元クラブに加入しており，その練習に行っていた。次女はダンスを習っていた。

夫婦は子供中心の生活をおくっていた。夫婦は子供の学校がおこなう劇の発表会，ディベート大会，社交ダンスの会といった行事にはたいてい参観に行っていた。学校の父兄会（ペアレンツ・アンド・フレンズ（Parents and Friends）と呼ばれている）は年に数回父兄に学校の掃除やペンキ塗りなどをしてもらっているが（この活動は「ワーキング・ビー」と呼ばれている），夫はそれに参加していた。妻は子供たちの習い事やスポーツのために車で送迎をしていた。夫婦は妻がかつて住んでいた町の近くに山荘を所有しており，夏休みや冬休みに子供たちをそこに連れて行っていた。また，夫婦の友人が所有する海辺の別荘に子供たちを連れて行って，週末をすごすこともあった。

年長の3人の子供たちは無料のコミュニティ新聞を近所の家々に配達するアルバイトを週に1度していた。家族は夏休みなどに海外旅行をするが，子供が稼いだお金をその足しにするのだそうだ。夫婦は，働くことの重要性を子供たちに教えるといった教育的な配慮から子供にそのアルバイトをさせていた。夫婦は教会の信者たちとボランティア活動をおこなっていた。パンの工場から売れ残ったパンを週に1度もらってきて，手分けをして恵まれない人々にパンを配っていた。

夫はインド系の移民であったが，A家の家庭生活でインド的なものを見つけることはなかった。私がインド文化に無知であるからかもしれないが，A家の家族はアングロ・サクソン（イギリス）の生活様式で暮らしていた。例えば，家族がインドの伝統的な服を着たのを見たことがなかった。また，オーストラリアン・ルール・フットボールというのは日本のプロ野球にあたる人気スポーツであるが，夫や男の子たちはオーストラリアン・ルール・フットボールをテレビで視聴したり，球場にしばしば足を運んでいた。しいて言えば，妻や夫の母親が家庭でカレーを使った料理を比較的頻繁に作ることから，A家の夫がインド系であることに気づかされるくらいであった。A家の夫は9歳のときオーストラリアに移住し，そこで青年時代をおくったから，オーストラリア文化を吸収して成長した。だから，A家の家族はアングロ・サクソンの生活様式で暮らしていたのだろう。

3　親族関係

A家の夫の父親は2000年に79歳で亡くなったが，母親は今でもダンデノンに一人で住んでいる。同じ敷地内に別の住宅があり，夫の弟夫婦がそこに住んでいる。その隣には，もう一人の弟夫婦が居住している。また，2人の兄はダンデノンの別の場所に住んでいる。母親は元気で，さまざまな活動に参加し，社交的な生活をおくっている。母親はダンデノンのカトリック教会の活動に積極的にかかわっており，その合唱団の一員として日曜日のミサで歌っている。また，レッド・クロスのダンデノン地区副会長もしている。夫は母親に小型車を買ってあげたので，母親は車を運転して自由に出かけることができる。

夫の母親は2週間に1度ほどA家に泊まりに来て，一家と交遊する。このときは，夫か夫の弟が車を運転して母親を連れてくる。ダンデノンとボックス・ヒルはかなり離れていることから（直線距離で20キロ・メートル），高齢者が長距離の車の運転をするのが危険だと考えているからのようだ。母親がA家に来たとき，家族と団らんをするだけでなく，夕食を作ったりもしていた。母親はたいていカレーを使った料理を作っていた。夫と母親はモーリシャ

スで使われるフランス語が変化したクレオール語（フランス語が単純化した言語）で話していた。母親は英語も流ちょうに話し，A家の父親以外とは英語で話をしていた。でも，母親はクレオール語で自分を最も表現できるようだ。夜は，一番年下の次女と一緒に寝ていた。1泊してから，自宅に帰った。子供たちは祖母にとてもなついていた。

A家の妻の母親は，ボックス・ヒルから東に5キロ・メートルにあるフォレスト・ヒル（Forest Hill）に住んでいる。彼女の夫は1999年に死んだが，ボーイ・フレンドがその後でき，一緒に暮らしている。ボーイ・フレンドはあまりいい人ではないらしく，母親のボーイ・フレンドのことが妻の悩みの種である。ただ，妻は母親の意志を尊重しており，母親にボーイ・フレンドのことをいさめたりはしていなかった。妻の母親は車を所有しており，車を自分で運転して1カ月に一度ほどA家に来る。泊まってゆくことはなく，代わりに，次男か次女を自宅に連れてゆく。子供は1泊して車で送られて帰ってくる。年長の長男と長女はボーイ・フレンドが祖母にできたということを理解でき，ボーイ・フレンドを好きではないので，誘われても祖母の家に泊まりには行かなかった。妻の母親はクリスマス・イブの日にもA家に来て，ボックス・ヒルのカトリック教会のミサに一緒に行き，A家でのクリスマス・パーティに参加していた。妻の母親がA家を訪問するときは，ボーイ・フレンドと一緒ではなく，いつも一人で来ていた。

A家の夫婦は夫の親族とよくつき合っていた。夫の父親の一周忌には，夫の母親や兄弟姉妹とその家族が集まって，ダンデノンのカトリック教会の日曜ミサに行った後，一緒に墓参りをした。その後，皆で夫の母親の家に行き，食事をしながら，旧交を温めたり，世間話をしていた。また，クリスマスの日の翌日であるボクシング・デイ（Boxing Day）には，夫の母親や兄弟姉妹とその家族がダンデノンに住む夫の兄夫婦の家に集まってパーティを開いた。大人たちは世間話に花を咲かせ，子供たちはクリケットなどをして遊んでいた。親族が集まって交流するという点で，クリスマスは日本の正月やお盆に似ている。

近親者がメルボルンのどこに居住しているかを整理しておきたい。A家の夫の兄弟は，夫の母親の近くであるダンデノンに居住していた。2人の弟の住居は母親の家のごく近くにあったが，2人の兄の住居はそこから車で5分くらいで行けるダンデノンの別の場所に住んでいた。夫の妹は夫の両親の近くに住むためにメルボルン大都市圏の別のところに住んでいた。前に述べたように，A家の妻の両親がボックス・ヒルに住んでいたことから，夫婦はそこに住居を構えることになった。このように，成人して両親の家を離れても，子供の多くは両親の家に近い場所に居住し，子供どうしも近くに住む傾向があるようだ。両親や兄弟の近くに住むのは，両親や兄弟と交遊をしたり，助け合いをしやすくするためであろう。

A家の夫はインド系の移民である。彼は，スコットランド系のオーストラリア人の女性と結婚していた。さらに，彼の末の弟は，スペイン系のオーストラリア人の女性と結婚をしていた。メルボルンは多民族都市といわれているが，さまざまな民族の人々が居住しているだけではなく，異なった民族の人々との結婚もかなり進んでいるようだ。

4　近隣関係

英語の近所の人 neighbours は，あいまいな言葉である。それは「向こう三軒両隣」といったきわめて狭い範囲の近所に住む人々だけでなく，もっと広い範囲の近所に住む人々をも意味する。オーストラリアでは，自宅から歩いて15分くらいのところに住むような人々も，neighbours と言えるようである。どの範囲に住む人々を neighbours という言葉で指しているかは，話の文脈から判断するしかない。ここでは，「自宅から歩いて5分くらいのところに住む人々」との社会関係を近隣関係と定義しておきたい。

メルボルンの郊外住宅地では，車道には必ず芝生の歩道がついている。研究期間中，私は大人が垣根越しに近所の人と世間話をしたり，子供たちが自宅の前の歩道で近所の子供たちと遊んでいるのを見たことはなかった。こうしたことから，近隣関係や近隣交際があまりないように思われた。また，近年では子供への性的ないたずらが増加している。そこで，子供が襲われそうになったときに逃げ込める家が指定されており，そうした家は「安全の家」（Safe House）と呼ばれている。「安全の家」となっている住宅には，Safe House のステッカーが掲げられている。A家のまわりにも，こうした家がいくつかある。

A家の右隣の家には，赤ちゃんのいる若い夫婦が住んでいる。A家の台所から隣家のベランダを見下ろせるようになっていることから，隣の夫婦と自然に話をするようになった。両方の家族とも妻が専業主婦で自宅にいる時間が長いことから，妻たちは台所とベランダの間でときどき話をしていた。両方の家族とも子供がいるから，隣の夫婦とは話が合うの

だろう。隣家の夫は美容室を経営する会社に勤めており，その美容室に置いてある古くなった女性週刊誌をA家の妻に持ってきてあげていた。A家の夫婦は夫が会計士をしている友人夫婦とともにその隣の夫婦を夕食に招いたことがある。また，クリスマス・パーティーにも隣の夫婦を呼んでいた。しかし，隣の夫婦に援助を求めることはなかった。A家の夫婦が多少なりとも近隣交際をしていたのは，向こう三軒両隣のうちこの右隣の家とだけであった。

歩いて5分ほどのところに，A家の次女と同じ幼稚園に通園している女の子が住んでいる。次女はこの女の子と友だちで，両親も親しくつき合っていた。A家の夫婦は次女をその女の子の家に泊まりに行かせたり，女の子を泊まりに来させたりしていた。そうしたことによって，両親は子供に社交性を身につけることを期待しているようだ。子供たちが通う学校の修道女がイスラエル旅行から帰国したとき，A家の夫婦は自宅でパーティを開いた。そのとき，夫婦は女の子の両親を招待した。また，クリスマス・パーティにも女の子と両親を呼んだ。女の子の父親は失業中であったが，パソコンを扱う仕事にかつて就いていたので，A家のパソコンのプリンターが故障したとき，女の子の父親がA家に来てその調子を見てあげていた。A家の家族がニュージーランドに旅行に行ったときに，私が家の留守番を短期間したことがある。私が家の雌鳥が生んだ卵を料理に使い切れなかったら，あまった卵をその女の子の家に届けるようにA家の夫婦に頼まれた。こうして見ると，A家の夫婦は女の子の両親ともっぱら交遊をしていたといえるだろう。

A家の夫婦が取り結ぶ近隣関係の事例から，次の2つのことが分かる。

第1に，夫婦に未成年の子供がいることが，近隣関係の形成に繋がることが多いことである。近所に住んでいるといっただけでは，近隣関係を取り結ぶきっかけがない。夫婦に子供がいると，同じような年齢の子供がいる近所の夫婦と共通の話題を持つことができる。そうした夫婦と言葉を交わすと，近隣関係が生まれやすい。また，子供が通う学校の同級生がたまたま近所に住んでいると，学校での活動をとおして両親どうしが知り合いになることができる。

第2に，メルボルンの住民は近隣関係をあまり取り結んではいないし，近隣交際をあまりしていないことである。A家の妻は専業主婦であり，自宅にいる時間が長いにもかかわらず，2つの世帯としか近隣関係を持っていなかった。就業している女性は自宅にいる時間が短いから，A家の妻よりも近隣関係や近隣交際は乏しいであろう。それから，留守のときの家の世話のようなことは，近接した場所に居住している近所の人々がしてあげやすいと考えられる。けれど，A家の夫婦はそうしたことさえも近所の人々に頼んではいなかったことにも着目すべきであろう。

近隣関係や近隣交際が乏しい理由の1つは，車が急速に普及し，車が大人に1台ずつある家庭が多いことである。1996年の国勢調査によれば，メルボルン大都市圏で1台の車を所有する世帯は36.7%，2台の自動車を所有する世帯は34.6%，3台以上の車を所有する世帯は12.1%であった。単身世帯は22.9%だから，メルボルン大都市圏では，ほぼ大人に車が1台ずつあるといえる。大人に車が1台ずつあると，外出に車を使い，近所を歩くことがあまりなくなってしまう。このことは，A家の事例で明らかであろう。夫が仕事に出かけるときは，車で仕事場へ行く。A家からボックス・ヒル駅近くにある子供の学校やショッピング・センターへは1.5キロ・メートルほどだから，歩いても行ける。しかし，妻が子供を学校に送迎したり，買い物に外出するときは，いつも車で出かけていた。親戚や友人の家に行ったり，行楽に行くときも車である。長男が通学にバスに乗る以外，この家族は公共交通機関を利用していなかった。このように，住民はたいてい車で外出するために，近所を歩くことがあまりない。近所を歩けば，近所の人から垣根越しに「ハロー」とあいさつをされたりして，顔見知りになることもあるだろう。しかし，住民は近所を歩くことがほとんどないから，近所の人々と知り合いになりにくいのである。

私はキャンベラで調査をおこない，その住民は近隣関係をあまり取り結んでおらず，近隣交際もあまりおこなっていないことを発見した。本稿の調査によって，メルボルンにおいても近隣関係や近隣交際がやはり乏しいことが判明した。とすると，住民が近隣関係をあまり取り結んでおらず，近隣交際があまりおこなっていないのは，都市計画の影響ではなく，住民が外出に車を頻繁に利用するところが大きいということになる。

5　友人関係

機会あるごとに，A家の夫婦は友人を夕食に招いたり，友人とレストランに行ったり，友人の自宅に夕食に招かれたりしていた。8月1日から10月14日までの2ヶ月半の間に，A家の夫婦は友人を夕食に3回招き，友人たちと1回レストランに行き，友人の自宅に1回招かれた。8月10日には，次女の

洗礼式のときの名付け親（godmother）となった女性の家に招かれた。彼女は手広く事業をしているが，今度再婚することになり，そのことを報告するために親しい友人を自宅へ夕食に招いた。A家の夫婦の他に，夫が会計士をしている夫婦，メルボルン大学の女性講師が招かれていた。9月7日には，子供が通っているカトリック系の学校の修道女がイスラエル旅行から帰国したということで，A家の夫婦がパーティーを自宅で開いた。このときは，教会の牧師，学校の先生，生徒の両親を合計で15人招待した。教会の牧師は洗礼式での次女の名付け親（godfather）でもある。9月14日には，A家の夫婦，次女の名付け親の女性とその再婚相手，ボックス・ヒルに住む夫婦が一緒にレストランに行って，夕食を取った。9月15日には，右隣に住む夫婦と夫が会計士をしている夫婦を自宅へ夕食に招いた。10月の初旬に，70歳の親しいニュージーランド人の女性がオーストラリアを旅行している途中に，A家に泊まりに来た。A家の夫婦は10月5日に彼女のために彼女の友人夫婦を招いて夕食会を開いた。

12月の下旬に，クイーンズランドから友人夫婦がメルボルンに遊びに来ていた。12月23日に，その夫婦と夫が会計士をしている夫婦を夕食に招いた。12月24日には，夕方に教会のミサに行った後，自宅でクリスマス・パーティーを開いた。次女の名付け親の女性とその夫，教会の牧師，ボックス・ヒルに住む夫婦，A家の妻の母親など25人がパーティーに来ていた。

A家の夫婦はこのようにたくさんの友人と交際をし，社交的な生活をおくっていた。しかし，これらすべての友人が，夫婦にサポートを提供しているわけではなかった。一部の特に親しい友人だけが，夫婦のサポート源となっていた。夫婦との対話から，彼らは次のようなサポートを受けていることが分かった。まず，現在の住宅を1998年にオークションで購入したとき，夫が会計士をしている友人夫婦は購入資金を一時的に貸してくれた。次に，教会の牧師や次女の名付け親の女性は海辺に別荘を所有しており，夫婦に別荘を貸してくれる。そこで，妻は子供とときどき別荘に泊まりに行っている。また，12月下旬に，家族はニュージーランドに旅行に行ったが，教会の牧師は教会のつてを使って安い航空券を購入するなどその旅行にいろいろ便宜を図ってくれた。それから，A家では小型犬を飼っているが，ニュージーランドへの家族旅行のとき，ボックス・ヒルに住む友人が犬をあずかってくれた。その友人は車でA家に来て，犬を自宅に連れて帰り，世話をしていた。さらに，家族が旅行で不在の間，その友人は数日に一回A家の住宅に来て，庭の植物に散水したり，郵便ポストから郵便物を取っておいたり，庭の雌鳥に餌や水を与えていた。こうしたサポート入手の体験談から，A家の夫婦は，夫が会計士をしている夫婦，教会の牧師，次女の名付け親の女性，ボックス・ヒルに住む夫婦と特に親密で，彼らと助け合いながら日々の生活をおくっていることが分かる。それから，留守のときの家の世話のように，提供者が近接した場所に居住していることが大切であると考えられるサポートも近所の人ではなく，友人に頼っていたことにも注目すべきだろう。

A家の夫婦の事例から，メルボルンの住民のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートについて次のようなことがいえる。その都市では大人が1台ずつ車を持つことが一般的になってきたから，自由に行き来できる地理的範囲が広くなった。そのため，交遊や生活の助け合いにおいて，近所の人々があまり重要ではなくなった。住民は広範囲に住む多くの人々の中から，気心が合ったり，利害や関心を共有する相手を自由に選んで友人関係を取り結び，そうした友人と交遊をしたり，生活の助け合いをおこなっている。

6　要約

メルボルンに住むオーストラリア人の家庭でホームステイをおこない，その家族生活や交際を参与観察した。そして，次の2点を明らかにした。

(1)　メルボルンでは，大人は1台ずつ車を持つことが一般的になってきた。外出にはたいてい車を使い，近所を歩くことが少なくなったから，近所の人々と知り合いになりにくくなった。そこで，近隣関係や近隣交際が乏しくなり，近所の人々と助けあうこともあまりなくなった。

(2)　車を使って外出をするので，自由に行き来できる地理的範囲が広くなった。そのため，住民は広範囲に住む多くの人々の中から，気心があったり，利害や関心を共有する相手を自由に選んで友人関係を取り結び，そうした友人と交遊をしたり，生活の助け合いをおこなっている。

（引用文献）

野邊政雄. 1996. 『キャンベラの社会学的研究』, 行路社.

【付論】メルボルンにおける近隣関係の歴史的変化

1　研究の目的

A家の事例でメルボルンでは近隣関係や近隣交際が乏しいということが分かったが，では近隣関係や

近隣交際がかつてはどうであったかに関心を持った。そこで，A家の夫婦よりも少し年上の2人の女性に子供のころは近隣関係や近隣交際がどうであったかについての聞き取り調査を2001年8月におこなった。1人は50歳のアイルランド系オーストラリア人（Bさん）であり，もう1人は57歳のイギリス系のオーストラリア人（Cさん）である。付論では，この2人の事例から，メルボルンでは近隣関係が近年どのように変化しているかを明らかにしたい。

2　アイルランド系女性の事例

Bさんは子供のころメルボルンの中心から10キロ・メートルほど東南にあるコールフィールド(Caulfield）に住んでいた（図1を参照)。1950年ころは，コールフィールドあたりがメルボルン大都市圏のはずれであった。両親は信心深いカトリックであったことから，Bさんは私立のカトリックの学校に通学することになった。近所には，カトリックの人々が多く住んでおり，両親はカトリックの人々とだけ近所づきあいをしていた。1950年代当時，カトリックとプロテスタントの人々との間には強い敵意があった。カトリックの人々は近所に住むプロテスタントの人々と道で会えば「ハロー」とあいさつはするが，家を訪問し合うことはなかった。

宗教によって人々が敵対していたけれど，カトリックの学校では，リベラルな価値観が教えられていた。その影響もあって，Bさんは近所のアングリカン（英国国教会）の家やユダヤ人の家に遊びにいったりしていた。そのことを両親に話したら，両親はショックを受け，Bさんにもうその家に行くなと言った。

両親は自営業を営んでおり，母親も家業を手伝っていたので，母親は近所の人々を訪問して，近隣交際をすることができなかった。代わりに，近所に住むカトリックの女性が5・6人家に来て，母親とよく話をしていた。メルボルンの郊外では，家で野菜やフルーツを栽培したり，鶏を飼うことは一般的であった。Bさんの両親は近所の人からフルーツや野菜をもらったり，逆に野菜や卵をあげたりしていた。

1960年代になると，オーストラリアでは人々は宗教の違いに無関心になってきた。そして，宗教が違うからといって，近所づきあいをしないといったことはなくなっていった。Bさんの両親も，近所に住むアングリカンの人々やユダヤ人の家族とも親しくつき合うようになった。両親はBさんに近所のアングリカンの家やユダヤ人の家を訪問するなとかつては言っていたが，1960年代になるとそれらの家族とBさんよりも親しくつき合うようになっていた。

3　イギリス系女性の事例

Cさんは非アングリカン系のプロテスタントの家族に生まれた。15歳になるまで，メルボルンの中心から17キロ・メートル東にあるブラックバーン(Blackburn）に両親と住んでいた。ブラックバーンは，A家の家族が住むボックス・ヒルからは東に3キロ・メートルほどのところにある。

1950年代，アイルランド人の家族がCさんの家の近所に住んでおり，その子供たちはCさんたちが通学する学校ではなく，カトリック系の私立学校に通学していた。Cさんの家族はそのアイルランド人の家族とあいさつくらいは交わしていたが，その家族を不審な目で見ていた。Cさん自身もその家の前を通ると変な感じがしたという。

当時，Cさんの家族は，大部分の近所の人々と親しかった。Cさんたち子供は近所で一緒に遊んでいた。子供をとおして，親どうしが知り合うことが多かった。人々は近所の家々を訪問したり，食事を近所の人々と一緒にしていた。また，危急のときには，子供を近所の人にあずかってもらうこともあった。Cさんは，近所の子供たちとグラウニー（ガール・スカウト）や教会に行った。学校に行くには鉄道の線路を渡らないといけなかったので，親たちは交代で子供を学校に引率して連れて行った。近所の家の人が病気のときは，デザートを持っていった。

その後，だんだんと宗教が違うからということで近所の人とつき合わないといったことはなくなってきたが，親密な近隣交際や助け合いもなくなっていった。

4　検討

BさんとCさんの事例から，メルボルンにおける近隣関係の変化について次の2点を読み取ることができる。

第1に，1950年代まではカトリックとプロテスタントの住民が近所に住んでいても，相互に不信感を抱いていて，近隣交際をおこなっていなかったことである。多くの場合，カトリックというのはアイルランド系住民であり，プロテスタントというのはイギリス系住民であった。だから，カトリックとプロテスタントとの対立というのは，アイルランド系住民とイギリス系住民の対立であったわけである。1960年代になって，オーストラリアでは人々は宗教の違いにあまり関心を払わなくなり，宗教が違う

といったことで近隣交際をおこなわないといたことはなくなっていった。つまり，かつては相手と近隣交際をおこなうかどうかを決めるのにおいて宗教が重要であったが，その後，宗教の違いは近隣交際において重要でなくなっていったというように，近隣関係が変化していったのである。

第2に，メルボルンではかつては親密な近隣関係があり，近所の人々がさまざまなことで助け合いながら暮らしていたことである。助け合いは，食べ物を交換するとか，子供を一時あずかるといったことにも及んでいた。ところが，だんだんと親密な近隣関係は消失してゆき，近所の人々が助け合うこともなくなってきた。私が参与観察をおこなったA家の夫婦の事例から，近隣関係や近隣交際があまりないことは明らかであろう。そこで，かつては親密な近隣関係が取り結ばれ，近所の人々が助け合いをおこなっていたが，だんだんと親密な近隣関係や助け合いがなくなっていったという，もう一つの近隣関係の変化を指摘できる。

私が参与観察をおこなったA家の事例とBさんとCさんの話を総合すると，親密な近隣関係が消失していったのは次の4つの理由からであると考えられる。

①1956年にテレビ放送が始まり，多くの家庭が1960年代にテレビを購入した。家庭でテレビを見ながら一家団らんをおくることが多くなり，近所の人々と交際をしなくなった。家族でテレビを見ている家庭を訪問することは一家団らんをじゃますることになるから，近所の人々を訪問することを差し控えるようになった。また，近所の人々を家に招くこともしなくなった。

②女性が社会進出をするようになった。妻は働きに出るようになり，平日の昼間に自宅にはいなくなった。また，妻は家事を週末におこなうようになったので，自宅にいる週末でも近隣交際をしなくなった。

③A家の事例で既に指摘したが，車が普及して，夫婦それぞれが車を持つようになった。そのために，住民が近所を歩くことが少なくなった。

④子供をきっかけに，近所に住む親どうしが知り合いになることが多い。しかし，子供への性的いたずらが増えたので，親は子供を家の前の歩道などで近所の子供たちと遊ばせなくなった。そこで，子供を介して親どうしが知り合いになることが少なくなった。

5　要約

メルボルンの近隣関係が歴史的にどのように変化したかについて50歳代の女性2人に聞き取り調査をおこない，次の2つ変化を明らかにした。

(1)　1950年代まではカトリックとプロテスタントの住民が近所に住んでいても，相互に不信感を抱いていて，近隣交際をおこなっていなかった。その後，住民が宗教の違いによって近隣交際をおこなわないといったことはなくなっていった。

(2)　かつては親密な近隣関係があり，近所の人々がさまざまなことで助け合いながら暮らしていた。しかし，だんだんと親密な近隣関係や助け合いがなくなっていった。